

『万葉集』 卷二 一〇七・一〇八番歌考

伊藤好美

一、問題の所在

〔卷二相聞部所載歌〕

A 大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時

に、大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を 大和へ遣ると さ夜更けて 暁露に

我が立ち濡れし (卷二・一〇五)

二人行けど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が

ひとり越ゆらむ (卷二・一〇六)

B 大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと 我立ち濡

れぬ 山のしづくに (卷二・一〇七)

石川郎女が和へ奉る歌一首

我を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のし

づくに ならましものを (卷二・一〇八)

C 大津皇子、竊かに石川女郎に婚ふ時に、津守連

通がその事を占へ露はすに、皇子の作らす歌一

首 未詳

大船の 津守が占に 告らむとは まさしに知りて

我が二人寝し (卷二・一〇九)

D 日並皇子尊、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首 女

郎、字を大名児といふ

大名児を 彼方野辺に 刈る草の 束の間も 我忘れめや  
(卷二・一一〇)

〔卷二挽歌部所載歌〕

E 大津皇子の薨ぜし後に、大<sub>大</sub>伯皇女、伊勢の齋宮

より京に上る時に作らず歌二首

神風の 伊勢の国にも あらましを なにしか来けむ 君もあらなくに  
(卷二・一六三)

見まく欲り 我がする君も あらなくに なにしか来けむ 馬疲るるに  
(卷二・一六四)

F 大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、

大<sub>大</sub>伯皇女の哀傷して作らず歌二首

うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見む  
(卷二・一六五)

磯の上に 生ふるあしびを 手折らめど 見すべき 君が ありといはなくに  
(卷二・一六六)

右の一首は、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢神宮より京に還る時に、路の上に花を見て、感傷哀咽して、この歌を作れるか。

〔卷三挽歌部所載歌〕

G 大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にし

て涙を流して作らず歌一首

百伝ふ 磐余の池に 鳴く鴨を 今日のみ見てや 雲隠りなむ  
(卷三・四一六)

右、藤原宮の朱鳥元年の冬十月

右のA-Gは、「大津皇子謀反事件関係歌群」と称される作である。これらが全て事実に基づく当事者の実作であるとすれば、歌群B-Dより、大津皇子謀反事件の背景には石川郎女をめぐる大津皇子と皇太子・日並皇子の妻争いがあったと推測することもできる。実際に研究史の最初の段階では、「大津皇子謀反事件関係歌群」の歌々は実作として享受されてきた。<sup>注1</sup>

このような、万葉集の歌を「実作」として読む、という研究の流れに一石を投じたのが、伊藤博氏の〈歌語り論〉<sup>注2</sup>である。伊藤氏は、宮廷を舞台に事件性のある恋愛ばかりが歌われる天智から持統朝の相聞歌群を、「歌物語構想」によって支えられた宮廷ロマンス歌集」と称した。つまり、卷二相聞部所載歌の殆ど全てが、宮廷を舞台としたロマンスとして享受されていたのである。伊藤氏がいう宮廷ロマンスは、卷二編者の時代に宮廷を身近に感じられる場で享受されたと見込まれる。卷二は、第四十三代天皇・

元明天皇の在位期を現在とされていることから、卷二相聞部に収められた作は、元明朝における貴族たちの社交の場で語られていた「歌語り」であると予想できる。

「大津皇子謀反事件関係歌群」内の作も、Gを除いては、全て卷二所載の歌であり、それらは伊藤氏が述べるところの「宮廷ロマンス歌集」の一部であると言えるだろう。伊藤氏の論を踏まえ、「大津皇子謀反事件関係歌群」が必ずしも事実在即さない作であるとするならば、歌群内の歌を検討するにあたっては、いかにして歌が生まれたのかという考察が必須となるはずである。

ここで、「大津皇子謀反事件関係歌群」を通覧したい。歌群内の波線部は人名、二重線部は地名である。C・Dの二首が「津守」「大名児」という人名を詠み込んでいることについては、次に挙げる駒木敏氏の論がある。<sup>注3</sup>

人名を含む当該の二首については、やはり大津皇子や日並皇子の手になるものではなく、第三者によるものと考えて妥当であろう。それらは、いわば当事者詠を装うところから発想された歌と位置づけられ、人名を詠みこむことで、「事件」の歌群たることを主張するのである。

駒木氏が論じた、「当事者詠を装うことで、事件の歌群たることを主張する」という点に関しては、人名を詠み込

むことのみでなく、地名であっても同様に言える可能性がある。これを念頭に置いて「大津皇子謀反事件関係歌群」を見ると、歌群Eに詠まれる「伊勢の国」は、二首の表現主体である大伯皇女が斎宮として長年奉仕していた地であり、歌群Fで詠まれる二上山は刑死した大津皇子が葬られた場所として知られている。そしてGで詠まれる磐余の地には、大津皇子が最期を迎えた磐余の長田の家があった。つまり、「大津皇子謀反事件関係歌群」内において、人名および地名を詠み込む歌は、「当事者詠を装う」ことを目的とし、「事件」の歌群たることを主張する」、仮託の要素が強い作だと言えよう。

一方、関係歌群のうち、歌群Bのみは、人名・地名を歌に詠み込んでおらず、大津皇子謀反事件について語るために作られた仮託の作としての積極的な要素が見当たらない。このことから歌群Bの二首は、そもそも謀反事件とは無関係に詠まれた歌を、第三者が転用した作であるとも推定できる。

そこで本稿は、「大津皇子謀反事件関係歌群」の一部として置かれた歌群Bの二首について、歌表現からその特質を導き出すことにより、二首がいかなる場面で詠まれた歌であるのかを明らかにしていく。そして、二首が本来は異なる場面で歌われた歌の転用である可能性を追究していき

たいと考えている。

## 二、男が歌う「待つ歌」

歌群Bの二首は、男が女への愛情を歌い、男の求愛を女がはぐらかしてみせる歌であるが、大津皇子を表現主体とする一〇七番歌が三句目で「妹待つと」と詠むことから、男が女を待つ歌であると理解できる。この点<sup>が</sup>、当該歌群の最大の特徴であると言えよう。妻問い婚の時代であった当時、通常は男が女の許を訪れるのであり、待つのは常に女の側であった。そのため、女が男を待つと歌うことが恋歌の一つの類型として存在し、万葉集中でも恋人の訪れを待つ女の歌は枚挙に暇がない。

そのような、女が歌う「待つ歌」に比べ数は少ないものの、男が歌う「待つ歌」も万葉集中には存在する。その全ての例<sup>注4</sup>を用例1〜18として挙げる。まずは、用例1から7を見ていきたい。

### 1 大伴宿禰家持が交遊と別るる歌三首（第一首）

けだしくも 人の中言 聞かせかも こだく待てど 君が来まさぬ  
(巻四・六八〇 大伴家持)

### 2 越中国守大伴家持が報へ贈る歌四首（第二首）

一、属目して思ひを発すに答へ、兼ねて遷任せる旧宅の西北隅の桜樹を詠みて云ふ

我が背子が 古き垣内の 桜花 はまだ含めり 一目見に来ね  
(巻一八・四〇七七 大伴家持)

### 3 忌部首黒麻呂、友の遅く来ることを恨むる歌一首

山の端に いさよふ月の 出でむかと 我が待つ君が 夜はふけにつつ  
(巻六・一〇〇八 忌部黒麻呂)

### 4 大伴四綱が宴席の歌一首

なにくすとか 使ひの来つる 君をこそ かにもかくにも 待ちかてにすれ  
(巻四・六二九 大伴四綱)

### 5 九年丁丑の春正月に、橘少卿并せて諸の大夫等、彈正尹門部王の家に集ひて宴する歌二首（第二首）

一昨日も 昨日も今日も 見つれども 明日さへ見まく 欲しき君かも  
(巻六・一〇一四 橘文成)

右の一首、橘宿禰文成 即ち少卿の子なり。

6 大伴四繩が宴吟の歌一首

言繁み 君は来まさず ほととぎす 汝だに來鳴け  
朝戸開かむ (巻八・一四九九 大伴四繩)

7 小治田朝臣広耳が歌一首

ほととぎす 鳴く尾の上の 卯の花の 憂きことあ  
れや 君が来まさぬ (巻八・一五〇一 小治田広耳)

用例1は、「こ」だく待てど 君が来まさぬ」と詠んで、相手の来訪がないことを嘆いている。作者の大伴家持は、同性の友人から冷たくされたことを寂しく思い、この歌を贈った。家持は、恋人の来訪を待ちわびる女の立場で歌を詠むことにより、来訪のない寂しさを相手に伝えたのである。また、用例2も家持の作で、大伴池主からの歌に応えた中の一首である。通常ならば、女から恋人への呼び掛けである「我が背子」という語を用いたのは、池主に対する親愛の情の深さゆえであろう。

用例3は、忌部黒麻呂が、友人がなかなか来ないことを恨んで詠んだ歌である。「我が待つ君」と、恋人の訪れを待つ女であるかのような歌いぶりを見せるこの歌も、用例1・2と同質のものと言える。また、大伴四繩が詠んだ用例4も、友人の来訪を待ちわびる心情を、「君をこそか

にもかくにも 待ちかてにすれ」と、あたかも恋人を待つ女のように歌う点で、用例1から3と同質である。この歌は宴席での作であるが、宴席歌には、男が「待つ」ことを歌う作が複数見られる。

用例5も宴席歌で、来客の側であつた橘文成から主人の門部王に向けた挨拶の歌である。宴を催してくれた主人への感謝と好意を恋心のように歌つたものと見え、親愛の情から恋歌のごとき様相を呈する点は、前述した用例1から4と共通している。

用例6は、「言繁み 君は来まさず」との歌表現により、まるで恋人の訪れがないことを憂う女の作であるかのような趣を見せるが、題詞から、「宴吟の歌」だと知れる。宴吟とは、宴席で古歌や民謡の類を吟唱することをいう。また、用例7は、用例6の二首後に収められた歌で、これも同様に宴吟と考える。男の疎遠に対する女の悲嘆を訴えるかのような、「憂きことあれや 君が来まさぬ」との歌表現を持つこの歌には、第三句から結句までが全く同一の類歌が存在する。<sup>注5</sup>用例6・7は、宴の場を盛り上げるために詠まれた歌と見てよいだろう。

続いては、用例8から10を見ていきたい。

8 好去好來の歌一首 反歌二首

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は

皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継

ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目

の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれ

ども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛り

に 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひ

て 勅旨（反して、大命と云ふ） 戴き持ちて 唐の

遠き境に 遣はされ 罷りいませ 海原の 辺に

も沖にも 神留まり うしはきいます 諸の 大御

神たち 船舳に（反して、ふなのへにと云ふ） 導き

まをし 天地の 大御神たち 大和の 大御御魂

ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り 見渡したまひ

事終はり 帰らむ日には また更に 大御神たち

船舳に 御手うち掛けて 墨繩を 延へたるごとく

あぢかをし 値嘉の軸より 大伴の 三津の浜辺

に 直泊てに 御船は泊てむ つつみなく 幸くい

まして はや帰りませ（巻五・八九四 山上憶良）

反歌

大伴の 三津の松原 搔き掃きて 我立ち待たむ

はや帰りませ（巻五・八九五 山上憶良）

難波津に 御船泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放け

て 立ち走りせむ（巻五・八九六 山上憶良）

天平五年三月一日に、良の宅にして対面し、

献るは三日なり。 山上憶良

謹上 大唐大使卿 記室

9

天平五年癸酉の春閏三月に、笠朝臣金村が入唐  
使に贈る歌一首 并せて短歌

玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は

うつせみの 世の人なれば 大君の 命恐み 夕

されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より 大船

に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ

い別れ行かば 留まれる 我は幣引き 斎ひつつ

君をば遣らむ はや帰りませ（巻八・一四五三 笠金村）

反歌

波の上ゆ 見ゆる小島の 雲隠り あな息づかし

相別れなば（巻八・一四五四 笠金村）

たまきはる 命に向かひ 恋ひむゆは 君がみ船の

梶柄にもが（巻八・一四五五 笠金村）

10

四年壬申、藤原宇合卿、西海道の節度使に遣は  
さるる時に、高橋連虫麻呂が作る歌一首 并せ

て短歌

白雲の 竜田の山の 露霜に 色付く時に うち越

えて 旅行く君は 五百重山 い行きさくみ 賊守  
る 筑紫に至り 山のそき 野のそき見よと 伴の  
部を 班ち遣はし 山彦の 応へむ極み たにぐく  
の さ渡る極み 国状を 見したまひて 冬ごもり  
春さり行かば 飛ぶ鳥の 早く来まさね 竜田道  
の 岡辺の道に 丹つつじの にははむ時の 桜花  
咲きなむ時に 山たづの 迎へ参る出む 君が来  
まさば (巻六・九七一 高橋虫麻呂)

反歌一首

千万の 軍なりとも 言挙げせず 取りて来ぬべき

士とそ思ふ

(巻六・九七二 高橋虫麻呂)

右、補任の文に検すに、八月十七日に東山・

山陰・西海の節度使を任ず。

用例8の長反歌は、山上憶良が遣唐大使・丹治比広成に贈った餞の歌である。長歌の結びと反歌一首目に共通して見られる「はや帰りませ」の句で、広成の無事の帰国を待ちわびる心情を表現し、反歌二首目で、帰国の際には「紐解き放けて 立ち走りせむ」と詠む。長歌に見えるように「つつみなく 幸くいまして」と、旅の無事を祈りながら帰国を待ち、船の音が聞こえたら「着物の帯紐も結ぶのもどかしいほどに、急いでお迎えに駆けつけます」とは、

まるで恋人の帰りを待つ女のようなのである。

続く用例9に挙げる笠金村の長反歌もまた、丹治比広成への歌である。用例8・9は、遣唐使餞別の宴で詠まれた歌なのであろう。9の長歌は「我は幣引き 齋ひつつ 君をば遣らむ はや帰りませ」と詠むが、幣を引き神に手向けて無事を祈るのは、家で夫の帰りを待つ妻の役目である。更に、反歌における「あな息づかし 相別れなば」や「恋ひむゆは 君がみ船の 梶柄にもが」との歌いぶりは、夫を送り出す妻の心情そのものと言える。これらの歌表現からは、憶良や金村が、恋人もしくは妻の立場で歌を詠んでいることが窺い知れる。また、用例10は、西海道節度使に任せられた藤原宇合に向けて、高橋虫麻呂が詠んだ長反歌である。この長歌でも「早く来まさね」「山たづの 迎へ参る出む」と、帰りを待ちわびる心情を歌っている。結句の「君が来まさば」との歌表現は、恋人を待つ女の立場となっていることの表れであろう。

ここで挙げた用例8から10は、いずれも餞別歌である。送る側・送られる側が共に男ではあるものの、送り出す側は、旅の無事を祈り、男の帰りを待ちわびる女の立場となつて歌を詠むのである。男が同性の相手に恋情表現を用いて歌を詠むことについては、高野正美氏の論を参考にしたい。高野氏の論において重要となるのは、大伴旅人が大

宰府から上京するときに沙弥満誓と交わした贈答歌である。

大宰帥大伴卿の京に上りし後に、沙弥満誓、卿に贈る歌二首

まそ鏡 見飽かぬ君に 後れてや 朝夕に さびつつ

居らむ (巻四・五七二 沙弥満誓)

ぬばたまの 黒髪変はり 白けても 痛き恋には あ

ふ時ありけり (巻四・五七三 沙弥満誓)

大納言大伴卿の和ふる歌二首

ここにありて 筑紫やいづち 白雲の たなびく山の

方にしあるらし (巻四・五七四 大伴旅人)

草香江の 入江にあさる 葦鶴の あなたづたづし

友なしにして (巻四・五七五 大伴旅人)

高野氏は右の歌群について次のように論じた。<sup>注6</sup>

現地での両者の交流は不明だが、この贈答歌からみて親交があったとみてよい。それは別当と帥という公的な関係としてではなく、鄙にあつて雅びを共有する仲間としての親密な関係であつたろう。この点は「見飽かぬ君」「痛き恋」という、多く異性間で用いられる誇張された親愛のことばに示されている。単なる儀礼的な関係では、これほどのくだけた表現はかえって礼を失することになる。対する旅人も「友無し」と応じており、「友」としての交流を前提としての贈答であ

ることが分る。

高野氏の論を踏まえると、大伴旅人や沙弥満誓といった貴族たちは、親愛の情を伝えるために、同性同士であっても恋情表現を用いて歌を詠んでいたことがわかる。ここで、先に挙げた用例1から10の作者を通覧してみると、その作者層は万葉後期の名の知れた貴族たちである。従つて、これらの歌は、貴族たちが社交の場において、相手に親愛の情を示すために詠んだものだとして理解できるのである。

### 三、山中での逢瀬

前節で述べたように、男が詠む「待つ歌」は交友関係を前提としている場合が多い。そのため、「待つ」相手が恋人でないものが圧倒的多数となる。万葉集に収められた歌を見ても、男が、恋の状況下で女を待つことを詠む歌は、次に挙げる用例11から18の僅か八例に限られる。

11 妹待つと 三笠の山の 山菅の 止まらずや恋ひむ

命死なずは (巻一二・三〇六六 寄物陳思)

12 道の辺の 草を冬野に 踏み枯らし 我立ち待つと

妹に告げこそ (巻一一・二七七六 寄物陳思)

13 上野 平度の多籽里が 川路にも 見らは逢はなも

ひとりのみして (巻一四・三四〇五 東歌)



14 今日もかも 都なりせば 見まく欲り 西の御馬屋  
の外に立てらまし

(巻一五・三七七六 中臣宅守)

15 遅速も 汝をこそ待ため 向つ峰の 椎の小枝の  
逢ひは違はじ

(巻一四・三四九三 東歌)

16 かくだにも 妹を待ちなむ さ夜更けて 出で来し  
月の 傾くまでに

(巻一一・二八二〇 問答)

16' 木の間より 移るふ月の 影を惜しみ 立ちもとほ  
るに さ夜更けにけり (巻一一・二八二一 問答)

17 あしひきの 山より出づる 月待つと 人には言ひ  
て 妹待つ我を (巻一二・三〇〇二 寄物陳思)

18 筑波嶺に登りて 嬺歌会を為る日に作る歌一首

并せて短歌

鶯の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に  
率ひて 娘子壮士の 行き集ひ かがふ嬺歌に  
人妻に 我も交はらむ 我が妻に 人も言問へ こ  
の山を うしはく神の 昔より 禁めぬ行事ぞ 今  
日のみは めぐしもな見そ 事も咎むな (嬺歌は、  
東の俗の語にかがひと曰ふ)

(巻九・一七五九 虫麻呂歌集)

反歌

男神に 雲立ち登り しぐれ降り 濡れ通るとも  
我帰らめや (巻九・一七六〇 虫麻呂歌集)

右の件の歌は、高橋連虫麻呂が歌集の中に出  
でたり。

用例11の「妹待つと」の句は、「三笠」の枕詞であると  
解されているが、「妹」即ち恋愛関係にある女を待つとき  
に笠が必要であったので、「三笠」の語を導き出す枕詞が  
「妹待つと」になったのだと考えられる。笠が必要とい  
うことから、男が恋人を待つ場所は屋外であったと推察でき  
る。このことを念頭に置いて用例12から18を見ていきたい。  
用例12は、恋人を待ちあぐね、同じ道を行きつ戻りつし  
ていたために、そこに生えていた草を踏み枯らしてしまっ  
た男の歌である。「草を冬野に 踏み枯らし」の歌表現に  
より、男が屋外で女を待っていることが明示される。また、  
用例13は、「川路にも 兎らは逢はなも」と、男が川辺で  
女を待っていたことを歌う。そして、用例14は「西の御馬  
屋の 外に立てらまし」との句から、表現主体である中臣  
宅守が馬屋の外に立って恋人を待っていることが明らかで  
ある。

続く用例15の三・四句目に見える「向つ峰の 椎の小枝  
の」の句は「逢う」の序詞で、交差し合う小枝を「逢う」  
ことに掛けたものである。この句により、表現主体である

男は、向かいの峰に生えている椎の木が見えるような屋外にいたのだと理解できる。用例16・17は、表現主体の男が屋外にいると明示しているわけではないが、二首とも月を視界に入れていることから、男は屋外にいると考えてよいだろう。もつとも、問答歌である16には返歌がある。16として挙げるそれは、表現主体の女が「月に見惚れて歩き回っているうちに、すっかり夜が更けてしまったのです」と述べる歌であることから、男は待ちぼうけを食わされていたのだと判断できる。妻問ひ婚の通例に反して男が女を待つ側となる場合、逢瀬の場所は屋外であるほかない。用例17も、女の家を訪れることを許されない男が、屋外の待ち合わせ場所で恋しい女を待っている歌であろう。

このように、恋の状況下で男が女を待つことを詠む歌は、いずれも男が屋外で女を待つ歌となっている。男が待つ側となる場合、その場所は必然的に屋外になるという事実が、用例11が示すように「妹待つ」という歌表現が「三笠」の枕詞になった由来であると考えられる。

ここまで用例11から17について触れてきたが、万葉集中にも数少ない男が女を待つ恋歌の中でも特に異質と言えるのが、用例18の短歌である。この歌は長歌の題詞により、筑波山での歌垣に際しての作であると知られている。短歌で「男神」と詠まれるのは筑波山の西側の山頂である男体

山であり、表現主体は筑波山での歌垣に参加した男であると思われる。この男が短歌中、「しぐれ降り 濡れ通るとも 我婦らめや」と詠む点に関しては、「楽しいから帰らないのだ」と、「まだ楽しんでいないから帰らないのだ」という、二通りの解釈ができるだろう。どちらの解釈を採用するかについては、次に挙げる歌を参考にした。

夫れ筑波岳は、高く雲に秀でにたり。最頂は西の峰は崢嶸しく、雄の神と謂ひて登臨らしめず。但、東の峰は四方に磐石あれども、升陟るひと塊圪し。その側の流るる泉は、冬も夏も絶えず。坂より已東の諸国の男も女も、春の花の開く時、秋の葉の黄たる節に、相携ひ駢闐り、飲食を齋齎て、騎より歩より登臨り、遊樂しみ栖遅ふ。其の唱に曰はく、

筑波嶺に 逢はむと 言ひし子は 誰が言聞けばか  
嶺逢はずけむ  
筑波嶺に 廬りて 妻なしに 我が寝む夜ろは はや  
も明けぬかも

詠へる歌甚多にして載筆るに勝へず。俗の諺に云へらく、筑波峰の会に媮の財を得ざれば、兎女と為すといへり。

右は、常陸国風土記に収められた筑波山での歌垣の歌で

ある。歌垣の本義は、農作物の豊作と人間の繁栄を予祝することにある。渡邊昭五氏は歌垣の意義について、「男女の性の交渉は、神迎えの斎場で行われた場合、穀物の実りをもたらず。その斎場は、穀物の結実を目的とした一年の折目々々にある。この穀物への感染が、歌垣の信仰である」と論じた。<sup>注7</sup> 男女の交渉が豊作を招く予祝的行為と考えられていたからこそ、「筑波峰の会に婿の財を得ざれば、児女と為ず」と言われたのであろう。この俗諺からは、歌垣の場において、結婚相手を見つけることがいかに重要視されていたのかが伝わってくる。

しかし、右の風土記歌謡の表現主体である男は、歌垣に参加したものの、妻となる女に巡り会えなかったようである。この歌について、土橋寛氏は、「恋の不幸を『軽いユ一モア』というよりは、あほらしさとして歌っていると思う」と述べた。<sup>注8</sup> そして、この土橋氏の論を受け、浅見徹氏は用例18の短歌を、「もてない男へのからかい歌としての様相が濃いもの」と論じた。<sup>注9</sup> 筑波山での歌垣を詠む右の風土記歌謡から考えると、用例18の短歌は、「まだ楽しんでいないから帰らないのだ」と歌って、未だに現れない妻となる女を山中で待ち続ける男の作と解するのがよいと思われる。風土記歌謡および用例18の短歌により、筑波山での歌垣の歌には、女との逢瀬が叶わず待ちぼうけを食わされ

る男がテーマ化されていると言ってもよいだろう。

ここで、用例11から18により導き出されたことを一旦まとめてみたい。妻問い婚の時代であった当時、男が女の家への来訪を許されない場合、逢瀬の場所は屋外となる。通常ならば、家に居る女が男の訪れを待つのであるが、屋外での逢瀬の場合は、男が、待ち合わせ場所に現われる女を待つ。それゆえに、男が女を待つ歌は必然的に、男が「屋外」で女を待つ歌となる。但し、上代歌謡や万葉集を通覧する限り、男が「山」で女を待つという歌表現は、歌群Bの一〇七番歌を除くと、前述した常陸国風土記所載の歌謡と、用例18の短歌との二例に限られる。この二例はいずれも筑波山での歌垣という場面設定のもとに詠まれた作である。従って、山中での逢瀬という歌表現は、山が男女の恋愛の場となる、「山での歌垣」という非日常的な行事の中でのみ生まれ得る表現であったと言ってよいだろう。

本稿で問題としている歌群Bは、「あしひきの 山のしづくに 妹待つと」との句から、表現主体である大津皇子が石川郎女を待っていた場所は山中であると理解できる。つまり当該歌群は、男が「山」で女を待つ歌であることから、「山での歌垣」に際して詠まれた歌を下敷きにしている可能性が高い。<sup>注10</sup> 当該二首は「大津皇子謀反事件関係歌群」内に配置され、謀反事件に関係のある歌として享受さ

れてきた。しかし、「山」での逢瀬という非日常的な場面を詠む歌表現から考えると、二首の本質は「山での歌垣の歌」にあると言え、謀反事件とは全く無関係に詠まれた歌を、第三者が転用した可能性が指摘できる。<sup>注11</sup>

さて、この二首に歌垣の歌の発想があるとの指摘は、従来なかったわけではない。橋本達雄氏は、当該二首は、「歌垣の応酬に源を発する掛け合いの伝統を引く相聞」であると論じている。<sup>注12</sup> たしかに、歌垣の歌の応酬を源とする

掛け合いの歌は繰り返し返し<sup>注13</sup>の表現が多く、その点でも当該二首に歌垣の歌の発想を認めることはできよう。しかし、繰り返し返しという形式上の問題から当該二首には歌垣の歌の発想があると論じる先行研究に対し、本稿は、一〇七番歌が「男が山で女を待つ歌」であるという点に着目して二首を考察してきた。既に述べてきたように、「男が山で女を待つ」という歌表現は、歌の表現世界においては極めて非日常的なものである。先に挙げた用例18の長歌では、「この山を、うしはく神の昔より 禁めぬ行事ぞ」と歌う。

「神」の「禁め」を歌うことから、「男が山で女を待つ」行為は本来、非日常的であり、かつ、禁忌性を帯びていることがわかる。そのような表現を持つ歌を「大津皇子謀反事件関係歌群」に取り込むのは、大津皇子と石川郎女との関係が非日常性・禁忌性の強いものであることを示唆する

という意図があつてのことではないだろうか。無論、表面的には、大津皇子と石川郎女が人目を忍ぶ仲であるがゆえに山中で逢うという解釈も成立するが、そのみに留まらず、二人の恋が極めて非日常的であり、禁忌に属するものであることを示すために、「山での歌垣の歌」の発想を取り込んだと考えられるのである。

#### おわりに―歌群配列の必然性―

ここまで、当該二首は「山での歌垣の歌」の発想を借りることで、大津皇子と石川郎女との恋が非日常のかつ禁忌に触れる行為であることを示唆していると述べてきた。

最後に、当該二首が「大津皇子謀反事件関係歌群」内の歌群Bの位置にあることの意義に触れておきたい。

「大津皇子謀反事件関係歌群」は、伊勢を訪れた大津皇子の帰京を、姉である大伯皇女が見送る歌群Aから始まる。そして、大津皇子が石川郎女を「山」で待っていたことが読みとれる歌表現から、二人の関係が非日常的で禁忌性の強いものであったことを物語る歌群Bを経て、Cの歌は、決して露見してはならないはずの二人の仲が「占へ露は」されたと述べる。禁忌である二人の仲が暴かれるという緊迫感の中、続くDの歌で、石川郎女が実は皇太子の思い人

であったことが明かされる。これによって、歌群Bより示唆されてきた禁忌のよって来たる所以が、大津皇子と皇太子との対立構造にあったことが示されるのである。

ここで歌の享受者はもう一度、冒頭に置かれた歌群Aを振り返ることとなる。弟を見送る大伯皇女の歌は、大津皇子と皇太子との対立関係を語るB・C・Dと併せて読まれることで、謀反決行直前の歌として享受される流れとなり、その緊迫感をより一層強める。もちろん、享受者はAの歌群を最初に見るのではあるが、続けてB・C・Dを見ることにより、Aの題詞に置かれる「竊」の文字に込められた禁忌侵犯の意味を、改めて理解する運びとなる。即ち、B・C・Dが読み手に与える緊迫感は、非日常性・禁忌性を示唆する歌群Bに発するとと言える。

歌群Bは、「大津皇子謀反事件関係詩群」として並べられた歌々の背後に、非日常のかつ禁忌性を帯びた恋愛の要素を付与する。そして、当該二首がBの位置に配列されることにより、事件性を帯びた緊迫感が関係歌群全体に及んでいる。歌群Bの配列は、「大津皇子謀反事件関係歌群」内に必然性を持ってなされたと言えるのである。

注1 「大津皇子謀反事件関係歌群」の歌々は実作であるとする説に、金子元臣氏『萬葉集評釈 第一冊』（明治書院

一九三五・一）、窪田空穂氏『萬葉集評釈 第一巻』

（東京堂 一九四三・六）、吉永登氏「大津皇子とその政治的背景」（『萬葉—文学と歴史のあいだ』 創元社 一九六七・二、初出「日本文学」一九五六・一）等がある。

2 伊藤博氏「卷二磐姫皇后歌の場合」（『万葉集の構造と成立 上』 塙書房 一九七四・九、初出「磐姫皇后の場合」『国語国文』二九四 一九五九・二）

3 駒木敏氏「万葉歌における人名表現の傾向」（小島憲之監修・伊藤博ほか編『万葉集研究 第二十集』 塙書房 一九九四・六）

4 男が歌う「待つ歌」には、次に挙げる卷九・一七六四番歌もある。しかしこれは、藤原房前が織女の立場で詠んだ歌であり、表現主体が女性となるので別扱いとする。

七夕の歌一首 併せて短歌

ひさかたの 天の川に 上つ瀬に 玉橋渡し 下つ瀬に 舟を浮け据ゑ 雨降りて 風吹かずとも 風吹きて 雨降らずとも 裳濡らさず 止まらず来ませと 玉橋渡す （卷九・一七六四 藤原房前）

5 うぐひすの 通ふ垣根の 卯の花の 憂きことあれや 君が来まさぬ （卷一〇・一九八八）

6 高野正美氏「貴族和歌—宴と遊覧の様相—」（『万葉歌の形成と形象』 笠間書院 一九九四・一一）

7 渡邊昭五氏「歌垣の問題点—序文のかわりに」（『歌垣

の民俗学的研究』白帝社 一九六七・三)

8 土橋寛氏「古代歌謡論」〔古代歌謡論〕三一書房 一九六〇・一一)

9 浅見徹氏「筑波山に登りてかがひをする歌」(神野志隆

光編『セミナー』万葉の歌人と作品 第七卷 山部赤人・高橋虫麻呂 和泉書院 二〇〇一・九)

10 山での歌垣は、風土記(逸文)により、撰津国雄伴郡

および肥前国杵嶋郡でも行われていたことが伝えられる。そのような場で歌われたと考えられる風俗(くにがら)である風土記歌謡と、歌垣を題材として詠まれた作品である用例18の短歌と、歌垣における男女の掛け合いを下敷きにしている当該歌とでは、厳密に言えば位相が異なっている。但し、「歌垣」という場面設定での歌として、同様の性質があると考える。

11 「我立ち濡れぬ」(二〇七番歌)と「我が立ち濡れし」

(二〇五番歌)との類似から、歌群Bについては仮託の作であるという可能性を完全に排除することはできない。しかしその場合も、根底に「筑波山での歌垣の歌」があるということとは動かないであろう。

12 橋本達雄氏「大津皇子・大伯皇女の詩歌 後人の仮託

か否か」〔万葉集の作品と歌風〕笠間書院 一九九一・二、初出「大津皇子・大伯皇女の詩や歌は後人の仮託か」『国文学 解釈と教材の研究』二五 一九八〇・

一一)

13 掛け合いの相聞歌の例として、万葉集中には次のような歌がある。

イ 玉くしげ 覆ふをやすみ 明けていなば 君が  
名はあれど 我が名し惜しも

(卷二・九三 藤原鎌足)

玉くしげ みもろの山の さな葛 さ寝ずは遂

に ありかつましじ(或本の歌に曰く、「玉くしげ

三室戸山の) (卷二・九四 鏡王女)

ロ み薦刈る 信濃の真弓 我が引かば うま人さ

びて 否と言はむかも (卷二・九六 久米禪師)

み薦刈る 信濃の真弓 引かずして 強作留わ

ざを 知るといはなくに

(卷二・九七 石川郎女)

ハ 梓弓 引かばまにまに 寄らめども 後の心を 知

りかてぬかも (卷二・九八 石川郎女)

梓弓 弦緒取りはけ 引く人は 後の心を 知る人

そ引く (卷二・九九 久米禪師)

14 拙稿『万葉集』卷二 一〇五・一〇六番歌考―大伯皇

女御作歌における歌の転用」〔水門〕二二 二〇一

〇・四)

\* 『万葉集』『風土記』の用例は、新編日本古典文学全集に

抛った。但し、私意により改めた箇所もある。

〈付記〉

本稿は、平成二二年七月一〇日に行われた、大学院生研究発表会での発表を基にしたものである。発表の席上、貴重なご意見を賜った諸先生方に篤く御礼申し上げる。

(いとう よしみ・実践女子大学大学院博士後期課程)